

『#暦のしずく』（沢木耕太郎著）を読んでみた。著書に『テロルの決算』（大宅壮一ノンフィクション賞）、『一瞬の夏』（新田次郎文学賞）、『深夜特急 第三便』（JTB 紀行文学賞）、『凍』（講談社ノンフィクション賞）、『キャパの十字架』（司馬遼太郎賞）、『天路の旅人』（読売文学賞）、『春に散る』などがある。ノンフィクション作家として出発した著者は、陰翳ある人物を何人も描いてきた。社会党委員長を刺殺した若きテロリスト、山口二矢。リングから静かに消えたボクサー、カシアス内藤など。

本作は、著者の初の長編時代小説で、江戸時代中期の宝暦8年（1758年）に死刑となった実在の講釈師・馬場文耕（ぶんこう）の謎に包まれた生涯を描いている。これは、剣豪小説（修業時代や無刀での立ち合い場面での強さ、素早さ）であり、戯作者・講談師の在り方を苦悩する生き様（軍書や古典にある史実を読み聞かせから脱却し、巷にある遊女や権力者の奢りを騙るようになる）を描いており、弱い百姓に寄り添う素晴らしい反権力小説（講釈による郡上一揆への関わり）である。とがめを受け、捕縛される危険を冒しながら。最後の章で、馬場文耕の獄門に至る様子が語られる。しかしながら、最後の二頁に思いもしない展開が待っていた。物語の最後は、著者の願望であるのかもしれない。希望と絶望が同居しながら物語は閉じるのである。

『まいまいつぶろ』（村木嵐著）では、口がまわらず、誰にも言葉が届かず、歩いた後には尿を引きずった跡が残ると、蔑まれた第九代将軍・徳川家重を新たな視点で描いているが、この徳川家重対して、著者はさらに好意的な別な見方で描いており新鮮であった。また、文耕を取り巻く人々が限りなく優しいので心癒される。

本年読んだ中で、最良と評価できる、多くの方に読んで欲しい作品である。

馬場 文耕は（1718～1759年）に活躍した、江戸時代中期の講釈師。世話物講談の分野を開き、「近世講談の祖」とも評価される。また、その作品を理由に処刑された近世日本の言語統制の唯一の犠牲者としても知られている。講釈師として「世話物」で高い評価を得、更に講釈師として武家の下に出入りしているうちに幕閣や大奥、大名を批判する「政事物」と呼ばれる作品も著すようになった。代表的な作品としては『当世武野俗談』、『近代公実巖秘録』、『近世江都著聞集』、『明君享保録』などが知られている。郡上一揆（金森騒動）についての講談を行った上に、それを実録本に著した『平良仮名

森の雫』（本書の「しずく」はこれに由来するのか）を頒布していたところを捕らえられ、江戸市中引き回しの上、打ち首獄門の判決が言い渡され、その日のうちに小塚原刑場で処刑された。享年 41。

郡上一揆

江戸時代、美濃国郡上藩で宝暦年間に発生した大規模な一揆のことである。年貢引き上げに藩内部の路線対立が絡んだ一揆が発生したが、一般的には郡上藩主金森氏主が改易され、老中、若年寄といった幕閣中枢部の失脚という事態を招いた宝暦 4-8 年の一揆を指す。

極度の財政難に悩まされていた郡上藩（二度にわたる領地替えと役目上かかる膨大な経費、秋は霜や降雪が早く、稲作りに困難が多く農業による生活苦）では、一揆開始前から各種の賦課が増大していた。そして一揆が頻発する。幕領である美濃郡代の代官から改めて郡上藩の検見法採用を命じたことにより一揆が再燃した。一揆勢は藩主への請願を行い、更には藩主の弟にとりなしを依頼するが、郡上藩側からは弾圧された。このような困難な情勢下、一揆勢は老中への駕籠訴を執行するに至る。老中への駕籠訴が受理されたことにより一揆勢は勢いを盛り返した。しかし当初進められていた審理は中断し、問題は解決の方向性が見られないまま長期化する。最終的に郡上一揆は目安箱への箱訴が行われ、時の将軍徳川家重が幕府中枢部関与の疑いを抱いたことにより、老中の指揮の下、寺社奉行を筆頭とする 5 名が幕府評定所で裁判が行われることになった。その結果、郡上一揆の首謀者とされた農民らに厳罰が下されたが、一方領主であった郡上藩主は改易となり、老中、若年寄らが免職となった。また将軍家重の意を受けて郡上宝暦騒動の解決に活躍した田沼意次が台頭する要因となり、年貢増収により幕府財政の健全化を図ろうとした勢力が衰退し、商業資本の利益への課税が推進されるようになった。

評価：★★★★★+α